天と地と

天と地と（上巻）

定　価　五八〇円

昭和三七年五月五日　第一刷発行

昭和三七年六月二〇日　第三刷発行

著　者　海音寺潮五郎

発行者　朝日新聞社　伴　俊彦

印刷所　精興社　大日本印刷

発行所　朝日新聞社　東京　大阪　小倉　名古屋

© 海音寺潮五郎　一九六二年

天と地と（上巻）　目次

疑いの雲　七
好色豪傑　一九
三ツ瓶子の紋章　三〇
美女鑑定　四二
ばくち　五四
返り忠　六五
枯れた血　七七
幼年の嫉妬　八九
米山薬師堂　一〇一

花野に死す　一三
かげろう　一三四
甘い晴景　一三六
にわか雲水　一四七
兵書と糸車　一六〇
兼備の女　一七一
諫言　一八三
精進談義　一九六
早熟な天才　二〇七
裏富士　二一八
旗上げ　二三九
雪来る　二四一
仁王おどり　二五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

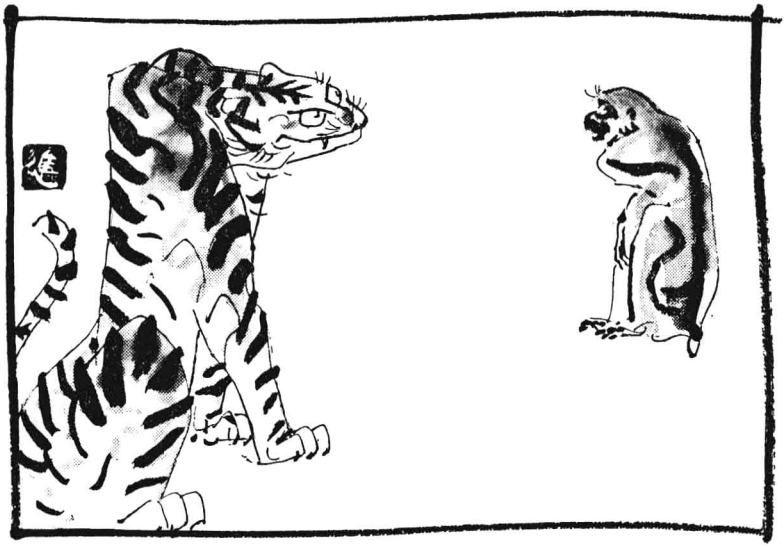
浅　緑　二六五
無残やな　二七七
鉄砲初見　二八九
寝ものがたり　三〇二
篠　懸　三二四
十分なる手ごたえ　三三六
演　出　三三八
悪いおなご　三五〇
越後越中古戦図　三六三
あとがき　三六五

挿絵・装幀　中尾　進

天と地と

上巻

海音寺潮五郎



疑いの雲

一

起きて洗面するとすぐ、弓をたずさえてあづちに行った。北国の正月下旬は、暦の上だけの春だ。石のようにかたい根雪があり、木々の芽はかたく閉じ、見るかぎりのものがまだきびしい冬のすがただ。

為景は、刺すような早朝の寒気の中を、もちまえの、骨ぶとな、せいの高い体軀の胸をそらせて、あづちに急ぐ。これが毎朝の日課になっていた。

為景のうしろには十三、四の小姓が二人、ひとりは為景の刀を持ち、一人は矢筒を持って従っていた。少年らのほおは寒気に赤らみ、吐く息が白かった。二人とも十分に寝足りて、生き生きとかがやく目をしていた。

やがてあづちにつく。

為景はみずから的をしつらえた。数年前まではこれは小姓らの役であったが、六十の声を聞いた時から、的を立てることは言うまでもなく、矢をひろいに行くことも、自分ですることにしている。

「この方がからだのためによい。年をとると、からだの節々がかたくなって、身のこなしが自由にならぬようになる。こうして一日に一度か二度、はいかがみしてからだをこなすと、工合がよいのじゃ」

と言うのであった。

きまりにしている五十立をさしつめ引きつめ射て、その間に五度も矢をひろいに行った。白いもののまじった小びんのあたりに、いつかほうほうと湯気が立って来た。いい気持であった。ハッシと的にあたる音も、一夜のねむりによどみ切っていた血が早い流れになって生き生きと全身の血管をめぐりはじめるのも、からだ中がぽかぽかとあたたかくなって薄く汗ばんでくるのも、いいようのないほどのさわやかさだ。

わけて、この朝はあたりがよいので、もう十立引くつもりで矢をひろいに行ったついでに、的を新しく立てかえて来たが、その時、小姓の一人が、

「あ、玄庵どのがまいります」

と言った。

医師の玄庵が、一葉もとどめず枯木林のようになった木立の間を来るのが見えた。小柄の五十男の玄庵は着ぶくれた黒い道服姿に黒い頭巾をかぶり、少し前かがみで、せかせかと急ぎ足だ。

為景は一目見ただけで、すぐ的にむかって身がまえ、矢をつがえて放った。こころよい音を立てて、矢は見事に星の真中にあたった。為景はまた矢をつがえて、ゆっくりと引きしぼった。なんのために今頃玄庵がこんなにいそいで来るか、大体わかっている。

（そうか、今日か）

と思いながら、また放った。はずれた。思いもかけず一尺もはなれてつきささった。

これまでの愉快さが一時に去って、気がいら立って来た。

「やめる。あれを取ってまいれ」

と、小姓に命じて、為景は向きなおった。

玄庵が冬の烏のように着ぶくれて、そのくせ痩せとがった寒そうな顔で立っていた。腰をかがめておじぎした。

「用か」

ふきげんを見せないように努力して言った。

「奥方様、定めて今日がそれと……」

と、玄庵は答えた。自分のもたらす報告がよろこばれないはずはないと信じきっている表情が、目もとにも口もとにもあった。

「今日か？　よし」

為景はぬいでいた肌をいれて、居間のある建物の方へ歩き出す。

ひょこひょこと玄庵がついて来る。

為景としては何か言わなければならない。このことを自分がよろこんでいないとは、誰にも知らせたくはなかった。

「それで、何時頃になる見込みか」

玄庵は、今日の潮時はどうやらこうやらでございます故、必定、どうやらこうやらでございましょうと言った。

為景は聞いていない。熱心に聞いているような顔をしているだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けだ。おりよく建物の入口まで来た。
「うむ、そうか、何分ともに、よろしく頼むぞ」
と言って、そのまま居間の方へ去った。

二

居間はきれいに掃除されて、中央に熊の皮のしきものをしき、火桶に真赤におこった炭火をうんと入れてすえてある。
為景は長い毛のふかぶかとした敷皮にすわって、真綿の入った絹の膝おおいでひざをつつみ、火桶に手をかざし、うちかえしうちかえしあたためた。いく度もこすり合せた。こすり合せると、かさかさとかわいた音が立った。老年のわびしい音だ。
(六十三、六十三で、新しく父親になるのか)
と、胸の奥でつぶやいた。
小姓が薬湯を持って来た。別段どこが悪いというのではない。養生のために玄庵が調合してくれた煎薬で、毎朝のむことにしているものだ。やや熱い目に煎じて、量もたっぷりとあるのを、ゆっくりと喫しおわると、食膳が来た。
一緒に猫が来た。膳をはこんで来た小姓の足もとにまつわりつくようにして入って来たが、すぐ為景のひざの上にのった。三毛の大きな、みにくい老猫だが、為景はそれの背中を撫でながら、食膳のすえられるのを待った。
溜塗の小さな膳の上は、玄米の飯と、汁と、ひものにした小さないわし二尾と、香のものだけの、至って質素なものであった。
為景は猫をひざからおろして食べにかかった。山もりに玄米の飯をもり上げた黒塗りの大きな御器をとり上げ、箸をとってつきそろえて食べようとした時、猫がぬっと首をつき出して、いわしの方に鼻づらを持って行った。
「行儀のわるいやつめ!」
為景はいわしを二尾一緒に箸ではさんで、簀子(後世の縁側にあたる)へ投げた。猫はのそりと立ってそちらへ行き、二尾ともくわえて為景のそばにかえって来て寝そべりながら食べはじめた。美しくつややかな熊の皮の上に、ぽろぽろと魚のくずがこぼれ散った。
「横着ものめ!」
と、また言いはしたが、その上は叱りもせず、為景も食べつづける。ずいぶん健啖であった。ぽろぽろするほどかたい飯を山もり二膳、汁と香のものだけで、いかにもうまそうに食べおわった。
膳がひかれると、為景はまた物思いにふける。火桶につき立てた火箸に右手をのせ、左の手はふところにし、しゃんと腰を立てた姿で、目はあけはなした庭にむかっている。ひざに猫がまるくなって寝ていたが、寒くなったのだろう、どこかへ行ってしまった。
為景は今年六十三になる。それでありながら、去年四度目の妻をめとった。一昨々年、三度目の妻が女の子を生み、産後の肥立がわるくてなくなったからであった。
新しい妻は同族で、古志郡栖吉の城主長尾肥前守顕吉の娘で、年はやっとはたちであった。

この結婚は、こちらは袈裟というその娘の美しさにひかれたのであるが、先方では政略のためであった。同族といっても遠い先祖の代にわかれて、今では他氏族同様だし、こちらは越後守護代としてこの国第一の豪族であるのに、先方は所領も少ない小城の主にすぎない。婚姻によって結びつくことは、先方には大へんな利益であるに相違ないのだ。話はこちらから持ちかけたが、何のためらいもなく乗って来たのは、先方にその下心があったからだと、為景は思っている。

三

そもそものおこりは、家中の若者らの雑談からであった。一昨年の秋、古志郡の栃尾に謀反の色を立てる者があって討伐に行った。こちらの出動が迅速だったので、反乱軍にはまだ勢がつかず、忽ち蹴散らして、首魁は討取り梟首したのであるが、その帰途、ある村で野陣を張って宿営した時のことだ。夜なかにふと目がさめて、寝つけないままに陣所を見まわっていると、さかんな焚火をしながら笑い興じている一団があった。

気づかれないように近づいて行き、聞くと、女話だ。敵の城を乗り取った時に女を引きさらった話、宿営の間に近くの山に避難している女共を見つけておさえつけた話、敵との長い対陣にはいつでもどこからともなくただよいついて来る遊び女とのいきさつ話、いろいろと出て来る。ある話は哀怨であり、ある話は残酷であり、ある話は滑稽であり、それぞれに興趣がある。物陰に立ったまま、為景は聞いていたが、そのうち、一人が、

「おれもこれまで美しい女もずいぶん見たが、栖吉の肥前守殿の姫君ほどの人は見たことがない。去年の秋のことよ。おりゃ自分用で栖吉に行ったが、あの村の普済寺の前を通りかかった時よ。ちょうど山門から侍・下人・小者を従えて出て来た四人づれの女があったが、中のひとり主人と見えるが途方もなく美しい。先方はおれのいるのに気づいて、ハッとばかりに被衣のえりを深うして顔をかくしたが、おれは最初の一目でのこるところなく見てとっていた。年頃十七、八、細おもてでぬけるように色が白く、すらりとした姿は若い柳を見るようであった。おりゃその時、歩む姿は百合の花という文句を思出した。まこと、深い谷間に人知れず咲いているあの真白な花を見る思いであった。気をうばわれ、茫然として見送っている中を、その人は行ってしまったが、おりよく通りかかった百姓女に、〝ありゃどこの姫君じゃ〟と聞いてみたところ、肥前守殿の御息女でお袈裟様と申すという。肥前守殿御息女とあっては、およばぬ高根の花とあきらめるよりほかはなかったが、それでも、おりゃ一月がほどはなやましくてならなんだぞよ」

と語って笑ったのだ。

為景は侍共に知られないようにして、そっと引きかえしたが、この時から肥前守の息女が忘れられない人になった。

「名は袈裟というたな。……高雄の文覚上人が恋した人妻が袈裟というたな。生れる時ほぞの緒を首にかけている子に袈裟という名をつけると聞いたことがあるが、文覚上人の恋した人妻もそうであったのであろうか。いや、肥前守が娘もそうであったろうか

……」

などとよく思ったが、その思いがつのって来たことを感ずると、心きいた家臣を使者に立てて、妻に申受けたいと申しこんだ。

年が孫ほどにちごうので、不安がないわけではなかったが、それほどむずかしい縁だとは思わなかった。小豪族が大豪族によりつき、忠誠の証(あかし)に人質をさし出すのは普通のことだ。その人質のふくみで娘を相手方の妻妾としてさし出すこともまた少なくないのだ。

実際、話はすらすらと運んで、袈裟は一月の後、去年の三月はじめ、府中の春日山城に輿入れして来た。その時、為景は六十二、袈裟は二十であった。

袈裟は想像した以上に美しかった。気立てもやさしく、年老いた夫に心からつかえてくれるようであった。

為景は大いに満足であったが、嫁して来て三月目に、早やみごもって三月になると打明けられた時、はっとした。

(早すぎる)

と、思った。しかし、

「それはうれしい。しかし、わしは前の奥を産でしくじらせて死なせてしもうたので、きつう心配になる。くれぐれも気をつけてくれい」

と、その時は言った。こう言った心にうそもかざりもなかったが、日を経るうちに、

(これはおれの子ではないのかも知れない)

という不快きわまる疑惑が出て来た。

六十以上になっても妊娠させ得る力のある男のいることは事実だが、それが相当稀(まれ)であることも事実と思わざるを得ないのだ。

(奥はおれのところへ来る前に、すでに子を腹に持っていたのではなかろうか)

と思った。

この疑いには証拠になるようなものは何もない。すべてが年のちがいすぎることから来る自分の劣等感から生じたものであることを、為景は十分に知っている。不当な疑惑であると反省もする。しかし、どうすることも出来ないのだ。

疑い出せばきりはない。この婚姻の申込みが何の抵抗もなくすらすらと受入れられたことまで疑いの種になってくる。

(家中の若い侍かなにかとことがあったので、よい機会(しお)にしておれにくれたのではないか)

と思うのだ。

若いうちなら徹底的にせんさくの出来るものを、この年になってはそれをつつしまなければならないことが——それどころか、疑惑を持っていることを人に悟られることすらあってならないと思うと、一層不愉快で、一層みじめであった。

(生れる子は女の子であってくれい。女の子ならいずれは人にくれてしもうのだ。おれの胤でなくてもかまわぬ)

と思うようになった。しかし、それは袈裟には言えない。

「わしには男の子も女の子も、それぞれ三人ずつもいる。男の子であっても、女の子であってもよいぞ」

と言っていた。
袈裟はそんな夫の心とは露知らない。
「男の子を生みたい」
と、一筋に思っていた。
「勇ましく強くかしこい子を生みたい」
とも思った。
春日山城の下の春日村に毘沙門堂がある。袈裟はここに祈願をこめて、百日参詣の誓いを立て、雨の日も、風の日も、一日もおこたらず、この誓いをはたした。
楠木正成の母は大和信貴山の毘沙門天に祈願をこめて、正成を生んだと伝える。正成の有名になったのは江戸時代に入ってからで、この時代はそれほど有名でもないし、この時代の将軍家である足利氏の敵であったというところから逆賊視されているから、越後の片田舎の小大名の娘である袈裟がこの故事を知っていたとは思われないが、毘沙門天が一名を多聞天といって、仏法守護の武神であることは知っていたろう。とりわけ、この時代は武勇を男第一の資格とする戦国の時代であっただけに、愛宕権現（勝軍地蔵）や毘沙門天の信仰のさかんであった時代だ。
「戦場に出ては不覚なく、家にあってはかしこく正しい武将となる子を、生ませたまえ」
と袈裟の祈願には必死な情熱がこめられた。
「よくないことをする」
と思いながらも、為景はそれについては何も言わなかった。

四

何時間そうして為景はすわっていたろう。火桶の炭が白い灰になり、為景のわずかな身じろぎにおこる風にさえゆらゆらとゆれて乱れるほどになった。
とつぜん、朝日が横雲を破って出て、一時に庭中が明りわたった。ふみかためてほこりをかぶって薄鼠色になっている根雪が美しく光り、木々の枝にさがっている氷柱がきらきらとかがやいた。
為景はその光に春を感じた。
春になると、また戦さだ。為景の武力によって一応の静平は得ているものの、決して安心の出来る越後ではないのである。春になって雪がとけると、為景に不平な分子がもそもそとうごきはじめるのが、毎年の例になっている。
「こんなくだらんことにこだわってはおれんのだ」
と思って、大きなのびをした時、急ぎ足に廊下を近づいて来る足音が聞えた。
「申上げます」
と、ふすまの向うで言う。
為景のうしろに、退屈げに、また寒げにひかえていた小姓四人の中から、一人が立って行ってふすまを開けた。
玄庵が両手をついて、しみだらけな禿げ頭を見せてうずくまっていた。
「はじまったか」
身をねじってその方を見ながら、為景がきいた。

「唯今、早や御誕生でございます」
「おお、そうか」
「若君でございます」
やれやれと思った。
「そうか」
正直に力ない声になったが、すぐ気づいて言いなおした。
「それはよかった。それはよかったな。うむ、男の子か」
「いいあんばいに大へんお軽く。それで、奥方様も至ってお元気でございます」
「そうか、それはよかった」
玄庵は得意気だ。彼が生ませたのではない。生ませたのは出入りの取上げ老婆だ。玄庵は産室の次の間でうろうろしているだけだったにきまっているが、自分が生ましたもののように、にこにこしている。為景が、案内せ、若を見がてら見舞ってやると言出すにちがいないと、待ちかまえいる表情であった。
しかたはない。為景は膝おおいをはらって立上がった。
「案内せい」

五

生れたての赤んぼは皆似ている。これくらい個性のないものはない。鱈子をゆで上げて皿につみ重ねたような顔をしている。しわだらけで目もあかずにうごめいているところは、かえり立ての雀の子や生れ立ての鼠の子とほとんどちがうところはない。他人の目にはただ生きものとしか思われないのだが、母親というものはありがたい。そのひたすらにぶよぶよとやわらかく、赤く、しわだらけな顔に、早くも個性を見つける。
初産直後の疲労と衰弱のなかにありながら、袈裟は飽かずに赤んぼを見つめていた。赤んぼの寝床は、彼女の寝床にならべてある。真綿の入った鬱金の絹の夜具にくるまれ、裾に湯たんぽを入れ、細く薄い髪を汗ばんだ頭の地肌にべったりとへばりつかせて、ねむっている。いや、単に目をつぶっているだけで、起きているのかも知れない。時々口許をゆがめたり、もぐつかせたりしているから。なんという小っちゃさ。なんというやわらかさ。これでちゃんと生きているのだ。なんという精妙さだろう。
「可愛いこと！　この子は殿にもあたしにも、よく似ている。小鼻の形など、殿そっくり。目じりから頬にかけてはあたしに似ている……」
と思っていた。
誰がそれがわかろう？　母親の愛情だけがわからせるのだ。
やがて、袈裟は疲れて、目をつぶったが、すぐそれは眠りにかわった。衰弱から来る深い眠りであったが、その口許にはなお微笑の翳がのこっていた。
為景が来たのは、それからすぐであった。
栖吉からついて来た女中の一人がそっと立って迎えた。
「若君も奥方様もようくおやすみでございます」
と、声を殺して言う。
無言でうなずいて、為景はへやに入った。玄庵もつづく。腰をかがめて、恐入った様子だ。為景は赤んぼのそばにすわって、の

ぞきこんだ。
やせて、しわだらけで、そのくせ真赤だ。猿のようだと思った。何よりもおそろしく小さくて、ひよわそうだ。これまでのどの子にも似ていないように思われた。どこか、自分にか、自分の両親にか似ているところを見つけ出したいと熱心に観察したが、見つけることが出来なかった。
為景は袈裟の方を見た。衰弱して一層繊細になった袈裟の顔は一抹の血の色もなく、目のささないところに生えている草の茎のようだ。その顔色と同じ色になった唇が少しあいて、白い歯がかすかに見えていた。鼻筋が削立てたように痩せとがっている。呼吸をしていないようだ。為景は不安になって、口許に耳を近づけた。かすかな呼気が耳たぶにあたった。
袈裟はぽかりと目をあけた。弱々しく微笑した。
「生みました、あたし。男の嬰児を」
得意げであった。
「うむ、うむ」
為景はうなずいて、
「……手柄であったな」
とつけ加えたが、こんな簡単なことばを出すのに、努力しなければならなかった。
「いい子でございましょう。殿様によく似ています。小鼻のあたり、そっくり。殿様に似た、強く、勇ましく、かしこい武将になるでございましょう……」
「うむ、うむ……」
為景はまた赤んぼを見た。とくに小鼻のへんを注意してみた。こんなひくい、こんな赤い、ぶよぶよの鼻のどこにおれに似たところがあるのだろうと思った。
「殿も御承知でございます。わたくし、この子のために毘沙門天様に百日のお参りをしたのでございます。きっとりっぱな武将になりましょう」
青白かった袈裟の頬は赤らみ、目に生き生きとしたかがやきが出て来た。昂奮のためであることは明らかであった。
「うむ、うむ」
と為景が言うと、袈裟はなお言いつごうとしたが、玄庵がわきから膝をすすめた。
「おそれながら、お脈拝見」
袈裟は夜具の下から手をさし出した。これも一層きゃしゃになっていて、つめたそうな手だ。玄庵はものなれた器用な手つきで手首をおさえて、小首をかたむける。
「よい名前をおつけ下さいましな。今年は寅年でございますから、虎千代などはいかがでございましょうか。りりしくて、強そうでございますから……」
玄庵は脈診をやめて、おしとどめた。
「お静かにお静かに。そう口をおききになってはなりません。産後は出来るだけ静かにおやすみにならなければなりません。血があたまに上がりますと、とりかえしのつかないことになります」
そして、為景に、
「このへんでお引取り願います。殿がおいでになっていては、奥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com